

文書も相達し私ハ御存知の通ゆへ総ていち波兩人ニ任せたるに  
 迎も御見積丈にてハ売（つゝ）はれ間敷と少し当惑の模様候に候いち杯ハ  
 何様して盛岡ハ此様に物か安いだろふと申居候去ながら只今丁  
 度百円の為替到着したれハ夏物を除き調らるゝ丈調させ可申」  
 波の縁談ハ不調と相成たり夫に外に子細ならず只三四日前に未  
 た国許よりの返事なき哉と問たるになしと答たれハ返事ハ思の  
 外遅い故を以て見れハ（実ハ遅カ）成就しそふないと先方にて  
 起し断はれぬ前に破談にするかよいとて昨日止めたと申来れり  
 上田の人分ハ成程慥と聞もし見もしたれとも何分子のあるハ奥  
 齒に物なりしかハ止めになりても波ハ勿論私共も左程残念にハ  
 存せず只又好折もあれかしと祈る迄なり」込たる事にハいちか  
 妊娠した様子今から子に産れられてハ厄介千万此頃漸く暮しの  
 仕方か付たれハいさ夫婦にて少し楽しまふと思の外子か出来て  
 ハ物入のみならずいちの体ハ勿論随て私の足も遠方へ運難くな  
 り妻を持ハ子の出生ハ覚悟の前とハいへ案外早くて込りたり去  
 なから御祖母様始皆様か喜はれるならんと思ひ夫のみにて胸を  
 慰め居候右の次第なれハ当度ハ兩人にて道行ハ迎も難成私計り  
 西行の二の舞と出掛ねハ成らぬ次第いちハ至極残念に思ひ毎日  
 の様に詰らない〜と申居候夏歩行れねハ責て今の中に箱根へ  
 ニも遊に行たい杯と此頃の御託せん出生ハ十月の由内にハ年寄  
 のなけれハ無可笑しな事もあらんと思はる今てハ澄も片付たれ  
 ハ此夏私の帰京時分母君か御同道被下るれハ至極宜と思居れハ  
 何卒御両親様にも此儀御考置被下たし御下りの節ハ忠ハ殿か誰  
 か必ず御同伴申者あるならん湯治に行れたと思召セハ何の事も

136 明治15年4月19日 菊池長閑宛

(長閑注記) 第五号 (欵と存す番号書留)  
 (たる帳紛失)

明十五、四月十九日

澄縁談整たる趣皆々様も無かし御安心の儀と祝居候右に付御注

あるまじくと存候且又母君にも一度や二度ハ東京見物被成ても宜しかるへし」私ハ相替らす齷齪して毎日毎夜講義の下調を致すのみ花見にも出掛兼誠に詰らない加之先月より貳拾円宛毎月文部省へ納金をする事となりて大学より四拾円貰ても実ハ半分ならず手に入らず是ハ一昨年八月廿日迄の学資金を請取て七月央にアメリカを出立たるにより一ヶ月分の修業料請取過の分を返納するなりたつた二十円にて此様に抄かねハ成ぬかと思へハ本に馬鹿らしくなり時々ハ止て仕舞ふ欵と思へ共私か出ぬと即今代るへき人ないから遣て呉といはれ又元恩を蒙た所なれハ聊返報したくもあるのて働居るなり」横田ハ今日出立の積にて別れたり一条も今日方着すへけれハ彼三十円も頓て請取へし

父君

武夫

(長閑注記)

「四月廿五日達し」